

牧師室から (2023.6.25)

先週からの続きで、サットマリー氏のコンサートについて一言述べさせていただく。プログラムはリゲティなどの現代曲が中心であった。私はそのような曲を、生のパイプオルガン演奏で聴くのは初めてだったので、衝撃的であった。掌を使ったり、両方の前腕を広げて鍵盤を抑えたりするのには驚いた。プログラム紙には、楽譜のコピーも小さく載っていたが、抽象画、例えばカンディンスキーの絵のようなものであったり、また図形であった。

これらはトーン・クラスター技法というものである。クラスターというのはコロナ禍で一躍有名になった言葉であるが、元々はブドウの房のことをいうものである。つまり音の塊であり、壮絶な不協和音である。

以前彼はそのような曲を、ドイツでラジオ放送するために古い教会で収録することとなったが、その教会で断られたことがあるというのである。

確かに、教会でコラールなどの伝統的なオルガン曲に慣れた人にとっては、受け入れることが難しいかもしれない。でも、例えば終末を表わすようなものや天地創造のような出来事を表現しようとするならば、吝かではないと思った。

(鈴木淳一牧師)